

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH, PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第132号 会 報 1991年5月15日

目次

	頁		頁
1. 第89回総会ならびに講演会報告	1	5. 次期, 次々期学会講演会開催地	5
2. 会長挨拶	2	6. 田中館賞推薦について	5
3. 田中館賞審査報告	3	7. JGG編集委員会報告	5
4. 運営委員会報告	4-5	8. 平成2年度決算・平成3年度予算書	6-8
*庶務	4	9. 国際交流事業について	8-9
*JGG報告	4	10. 研究助成金案内	9
*学会基金運用	4	11. おしらせ	9-10
*新入会員	5		

1. 第89回総会ならびに講演会報告

第2回地球惑星科学関連学会合同大会が4月2日から同月5日にかけて、共立女子大学八王子キャンパスで行われ、大会2日目には第89回地球電磁気・地球惑星圏学会総会と講演会が実施された。総会は藤会員の開会宣言、小川議長の選出、小林大会委員長の挨拶に始まり、田中館賞の授与、引き続き、審査報告がなされた。さらに、下に示す式次第に従って、会長挨拶、運営委員会報告、JGG編集委員長報告があり、総会成立を確認の後、議事に入った。前年度の決算および本年度の予算を可決した後、学会基金の運用に関して深尾委員から案が示され、活発な討論が行われたが、ほぼ、原案通り可決された。次期、次々期学会開催地に関して現状が報告され、謝辞、閉会の辞をもって、ほぼ定刻に総会を終了した。

第89回総会式次第

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 開会の辞 (藤会員) (2) 総会議長指名 (議長: 小川運営委員) (3) 大会委員長挨拶 (小林大会委員長) (4) 田中館賞授与 (西田会長) (5) 田中館賞審査報告 (西田会長) (6) 会長挨拶 (西田会長) (7) 運営委員会報告 <ul style="list-style-type: none"> *庶務報告 (町田運営委員) *JGG関係報告 (深尾運営委員) (8) JGG編集委員長報告 (小川編集委員長) | <ul style="list-style-type: none"> (9) 議事 <ul style="list-style-type: none"> *平成2年度決算 (佐藤運営委員) *平成3年度予算 (佐藤運営委員) *学会基金の運用 (深尾運営委員) *学会規約改正 (深尾運営委員) *次期開催地 (大塩会員) *次々期開催地 (本蔵運営委員) *その他 (10) 謝辞 (河野評議員) (11) 閉会の辞 (小川運営委員) |
|---|---|

2. 会長挨拶

西田 篤弘

この度はからずも会長に選出されました。学会の研究活動がいつそう活発になるように、微力を注ぎたいと考えております。皆様のご協力をお願いします。

当学会の会員は地球電磁気・地球惑星圏の研究を一層発展させ、諸現象をより深く理解することをめざしていますが、そのためには研究の現状と重要な課題をはっきりと把握しておくことが大切です。そこで、当学会と深いつながりのある日本学術会議・地球電磁気学研究連絡委員会の下におかれた将来計画ワーキング・グループでの検討に基づいて、「宇宙空間」、「中層・超高層大気」、および「地球・惑星内部」の各分野について、研究の現状と目指すべき方向を考えてみたいと思います。

現在にいたる宇宙空間の研究は、いくつかの素過程を明るみに出し、また宇宙空間が性質の異なる多数の領域で構成されていることを示しました。素過程の多くは高温・希薄な無衝突プラズマの物性を反映するもので、その中には沿磁力線電場や磁力線を横切る拡散など、いまだに本質が十分に究められていないものも数多くあります。これらの素過程の研究は、今後も強力にすすめていくことが必要です。さらに、システム全体を理解するためには、異質な領域の境界に起きる物理現象の解明が重要な課題です。磁気圏の境界面がその一例ですが、このような境界面では無衝突プラズマ特有の緩和過程が働き、境界を貫く粒子や運動量の輸送を決定することによって、領域間の相互作用に支配的な影響を与えています。また、無衝突プラズマは強い非平衡、非一様の世界で、そこでは多数の素過程が競合しています。それらの素過程がある時は他を抑圧し、ある時は助け合って一つのマクロな状態をつくっているのです。個々の素過程を明らかにするとともに、この競合過程を解明することが、システムを総合的に理解するために不可欠です。

中層・超高層大気は、MAPにはじまる80年代の研究で、それぞれの高度・緯度領域ごとの理解が整うという段階に達しました。90年代においては、全地球的に観測を展開する努力が続けられ、今世紀末には中層・超高層大気についても経年変化を議論できるデータが拡充整備されるものと思われます。大気中ではエネルギーや運動量が輸送されるだけでなく、物質そのものが大き循環しています。水、オゾン、その他微量物質などの物質循環の様相とその効果の解明は、中層・超高層でも今後の研究の重要な柱です。物質循環を通しての赤道域と極域のカップリングは、とくに興味深い問題です。オゾンをはじめとする物質循環過程の解明は、地球環境の保全をはかるための方策を考える時に、その基礎を与えるものとしても重要です。また、下層、中層、超高層の大気の鉛直方向の結合の理解も重要な課題です。たとえば中層大気の流れは、下層起源の波動と超高層への熱放射とのバランスに依っています。さらに、高度100km近傍には、温度構造、拡散機構、および組成に関する遷移が集中しており、その原因の解明は地球大気圏の成立と維持を理解するために本質的な意味を持っています。

地球・惑星内部の電磁気学は、1970年以降、質的な変貌をとげました。プレートテクトニクスは、地球内部および表層の各部分が互いに相互作用をしようことによって全体の地球活動が存在するというグローバルな視点と、現在の地球現象を長時間の歴史を通じての活動の一環として捉えるという時間的发展の視点を導入しました。また惑星探査の進展は、内部の物理学においても地球と惑星を統一的な視点から見ることを可能にしました。プレートテクトニクス的发展において地球電磁気学が大きな役割を果たしたことはよく知られています。現在の地球内部の物理学は、より地球の深部にあるマントル下部やコアの活動を考慮にいれ、惑星をも視野にいたれた地球・惑星科学へと進展しつつあります。地球・惑星の電磁場はまさにコアやマントルなど地球深部に直接関連した事象ですから、将来の地球・惑星科学にとって電磁気学的観点からの研究はますます重要なものになると考えられます。その際、地球・惑星の各部分の構造や素過程だけに捕らわれず、各部分の相互作用を重視することが重要です。

地球電磁気学研連では、このような認識の上になつて今後約15年間における重要な課題と、研究推進のための方策を検討しており、今年の夏までに結論を出す予定です。次回の総会でまたお話ししたいと考えています。

さて、総会ではおめでたい話題を報告することが慣例になっています。この度はとりわけ嬉しい事があります。当学会の元会長で名誉会員の前田憲一先生が平成2年12月に日本学士院会員に選ばれました。前田先生は、電離層物理、電離層電波伝播、通信方式などの広い分野で顕著な業績をおあげになり、またIGY以来、わが国のロケットによる宇宙空間計測と組織作りの中心人物の一人として、開拓者的な貢献をなさいました。また、中沢清会員が井上學術賞を授賞なさいました。あわせてお喜び申し上げます。

第89回総会で、田中高文、酒井英男、田中秀文の各会員に田中館賞が授与されました。いずれも、地球電磁気・地球惑星圏学会の分野で顕著な業績をおおげになりました。それぞれの会員の研究業績を以下にご紹介します。

124号 田中高史会員

論文名「低緯度電離圏擾乱の研究」

日本において静止衛星の運用が本格化するにつれて、それまで極域と磁気赤道付近にしか発生しないとされていたマイクロ波帯衛星電波の電離圏シンチレーションが、地磁気嵐時に中緯度においても発生することが観測された。田中高史会員は、国内外にわたる各種の電離圏観測データと地磁気観測データを組み合わせた解析を行ない、中緯度のマイクロ波シンチレーション発生の原因となる中緯度電離圏中の擾乱メカニズムを研究した。その結果、東向き磁気圏電場が中緯度に侵入して赤道異常の拡大を起こし、その結果赤道異常帯クレフトの外側付近に形成される電子密度の急勾配域に大規模なダクト構造が作られ、マイクロ波シンチレーションの発生に到るといふ、一連の中低緯度電離圏擾乱現象のメカニズムを世界で初めて明らかにした。赤道異常の拡大を起こす電場は、E層電気伝導度の低下する夜間に磁気圏から侵入してきたものであり、環電流が成長している時に極域擾乱に伴って夕方側で大きな東向き電場の侵入が起こる。これらの中低緯度電離圏中の変動はサブストームのエネルギー蓄積過程ですでに始まっている。この一連の現象は非常に顕著なものであるにもかかわらず、これまでほとんど気づかれていなかった。

125号 酒井英男会員

論文名「考古学的遺跡・遺物を用いた地球磁場強度の変動に関する研究」

過去の時代に遡って、地球磁場の強度がどのように変動したかを明らかにすることは、過去の地球磁場方向の変化を知ることと同様に地磁気の本質を明らかにする上で非常に重要である。

酒井英男会員は、まず、多くの考古学的な試料の測定を通じて、経験的にどのような試料が忠実に地磁気の記録を保持しているかを見極める眼を養い、質のいい試料を多く集めた。更に、二次磁化成分を取り除く方法として、酸に対する磁性鉱物の溶解度の違いを用いて残留磁化成分を選択的に分離する化学消磁を適用した。試料を強酸溶液に浸して、先に溶ける酸性鉱物を除去してから測定することにより同一遺跡から出土した試料、即ち同時代の試料の測定結果が高い精度で一致することを見出した。

酒井英男会員は、上記の方法で日本各地の考古学的遺跡から出土した土器、ネアンデルタールの遺跡で発見された焼土、及びデボン紀(3.5億年前)に堆積したビーコン砂岩を試料として測定を行ない、従来はほとんど不可能に近いと考えられていた古い地質時代の地磁気強度を精度よく求める道を開拓した。

126号 田中秀文会員

論文名「日本の火山岩による過去1万5千年間の地球磁場強度変化の実験的研究」

田中秀文会員は、過去の地球磁場強度を正確に求めるための実験手段であるThellier法について、人工試料や現代に噴出した溶岩を用いてその実験精度や適用限界を明らかにするとともに、日本の火山岩を用いて過去1万5千年間にわたって地球磁場強度の変動を明らかにした。Thellier法がどの程度の磁場範囲まで適用され得るかという問題を実験的に調べた研究は特にユニークである。地磁気ダイナモをより深く理解するためのデータとしては現在の地球磁場の観測だけでは全く不十分であり、特に地球磁場強度のデータは地磁気ダイナモ・モデルにとって重要であるにもかかわらず十分に研究されていないことを考えるとき、田中秀文会員の実験結果は地磁気原因論の基礎データとして非常に重要となる。過去の地球磁場の方向の変動はたかだか数百年から千年のスケールであることは従来の研究や堆積物の残留磁化の研究から明らかにされているが、富士山と大島の溶岩を用いてほぼ9千年前に地磁気強度の極大があったことを示して以前から議論の対象となっていた地磁気双極子の1万年近くの長期変動をほぼ結論に導いたことは、貴重な成果である。

4. 運営委員会報告

◆庶務報告

前回の総会以降、平成3年1月14日に、第15期と第16期の運営委員の引継をかねて、第160、161回 地球電磁気・地球惑星圏学会運営委員会をシリーズにして、東京大学地震研究所にて行った。第15期行武会長より、総括的な引継事項説明があり、その後、第16期の運営委員の役割分担を以下の様に決定した。(敬称略)

会長	西田	広報	長野、西谷
総務	町田	プログラム	鳥居、林、小川、乙藤
庶務	寺沢、林	大会	乙藤、小川(秋期)
会計	佐藤、前沢		本蔵、福西(春期：連合大会)
雑誌	深尾、浜野	基金	深尾、福西、本蔵、小川、
渉外	本蔵、福西、浜野		佐藤、浜野、丸橋

新委員決定の後、前期各担当委員から要点や注意事項が具体的に述べられた。その中で、テラ学術出版との契約更新については次のJGG報告を参照されたい。沖縄での次期学会(開催責任者：大塩会員)には、通総研沖縄観測所の協力も正式に要請する事になった。また、第15回日本学術会議会員候補者ならびに会員推薦人/推薦人予備者選挙の開票が行われ、会員候補者として小口高、行武毅両会員、推薦人として西田篤弘会員および推薦人予備者には大家寛会員が選出された。

学会前日の4月1日には、宇宙科学研究所において、第162回運営委員会が催され、平成2年11月より平成3年3月の期間に申請を受けた新入会員の承認、ならびに、昨年度決算/本年度予算の審議を行った。また、学会基金による国際学術交流事業およびそれに伴う規約改正に関しての詳細な議論が行われた。さらに、第89回総会の式次第の作成・検討がなされた。確認事項として、科学研究費補助金審査員に関して、本年9月まで運営委員会内で選挙を行い推薦会員を選出する事、ならびに、日本学術会議地球電磁気研連委員推薦者を本学会・全会員による選挙によって、夏期に選出する事が取りあげられた。

◆JGG報告

当学会が(株)テラ学術図書出版からJGG550部を越えて購入する価格を従来の1巻(12冊)3,000円から4,000円に値上げすることとし、平成3年1月25日付けでこの旨文書(覚書補足)で確認致しました。また今年から最終原稿をブレーンテフで受け付けることが可能になりました。出版迄の期間が短縮される他、校正の手間が省ける、別刷価格も安くなる、等、投稿者側にもメリットが多いことから運営委員会もこの形式での投稿を奨励したいと考えています。詳細は(株)テラ学術図書出版に直接聞いて下さい。幸いJGGの発行は順調に進められており毎号が当月内に会員の手元に届けられています。しかし、最近では特集号のウェイトが論文集、頁数ともに全体の6割近くを占めていること、会員の論文集が全体の半数以下となっていること、更に春季/秋季講演会の総講演数の1割弱しかJGG掲載論文になっていない等、現状は極めて憂慮すべき事態です。運営委員会からも会員諸兄の投稿を切望するものです。

◆学会基金運用

「学会基金」は民間会社等からの賛助会費を積み立ててきたもので、学会の不測の事態に備えた「備蓄」として先輩から引き継いできた貴重な財産です。以前より、運営委員会ではこの学会基金をWPGM90の際の拠出金のように当学会発展のために積極的に活用すべきと考え議論を重ねてきました。議論の過程で固まった学会基金運用における運営委員会の基本的な考え方は以下の通りです。

○賛助会費は本質的に臨時収入であり、恒常的な一般会計に繰り込むのは学会運営上不健全である。従って基金の活用は臨時(又は特別)事業に限るべきである。

○賛助会員が誇りに思ってくれるような積極的な活用が是非とも必要である。

足掛け2年に及ぶ議論を経て、先の総会で御賛同いただいた「国際学術交流事業」が、今般漸く発足する運びとなりました。当事業は、毎年増加する額(今年は175万円)の半分強を活用するものです。残りの半分弱をどう活

用するか、また約1,000万円になった基金全体をどうするか、引続き真剣に議論していきたいと考えています。従来通り、議論の過程は総会等でも適宜御報告したいと考えています。会員諸兄からも御意見、御提案を運営委員会までお知らせ下さい。

◆新入会員

平成3年4月の運営委員会で次の3名の方が新入会員として承認されました。

(正会員)	713-1527	深見 哲男	石川工業高等学校
(正会員・学生)	413-1528	安宅 学	電気通信大学
(海外会員)	013-1526	Miah M. Adel	Univ. of Arkansas at Pine Bluff

5. 次期、次々期学会講演会開催地

次期(1991年秋)の第90回総会ならびに講演会は琉球大学のお世話により10月2日~4日の三日間、沖縄で開催します。宿、交通手段の予約は早めにお願ひします。講演・セッションのスケジュールは7月中旬発送の会報第33号で連絡の予定です。準備の都合上、講演時にビデオまたは映写機を使われる方は、申込と同時にその旨をプログラム委員までお知らせ下さい。なお、秋の学会の申込郵送先はこれまでとは変更になりますのでご注意下さい。

また、次々期(1992年春)の学会は今春に引き続き第3回地球惑星科学関連学会合同大会として開催の予定です。現在、候補地(京都大学)を検討中です。

6. 田中館賞推薦について

今年度の田中館賞の推薦のメ切は8月31日です。候補者を推薦なさる場合には、推薦状、業績(論文)リストと別刷り、略歴書、各11部を期日までに学会会長宛お送りください。

7. JGG編集委員会報告

JGG編集委員長 小口 高

1) Letter to the Editorについて

JGGではかねて、印刷を速くすることを心がけて来ましたが、その一環として、今回、Research Noteを廃止して、かわりに、新しくLetter to the Editorのセクションを導入することにしました。従来のResearch Noteはページ数の制限だけで、他は全くFull Paperと違いがありませんでしたので、メリットが乏しかったように思います。レターの場合、レフェリーは一人で、かなりのスピードアップが期待できます。速報を必要とする論文をレターセクションに投稿することをお薦めします。レターのページ制限は刷り上がり6ページ以内ですので、かなりの論文が投稿できます。

2) 論文最終稿をTeXフロッピーで

すでに、本年一号から、部分的にTeXフロッピーで論文を受け付け、処理しています。このために、当該論文は印刷までの時間が大幅に短縮されています。なお、TeXフロッピーで最終稿を送って頂ける場合は、別刷代がほぼ半額と云う特典もあります。前述のレター論文をフロッピーで考えて頂ければ、投稿から印刷までの時間は大幅に短縮でき、速報性を重視する論文には有効と考えています。

3) JGG論文奨励賞について

昨年は残念ながら該当論文なし、と云う結果になってしまいましたが、現在、本年の論文賞の審査が進行しております。よい結果が御報告できることを希望しています。

4) 編集委員長からのお願い

会員の皆様には今後とも、レフェリーなどのお願いをすることになりますが、どうぞ、レフェリーの立場においても、速い印刷にご配慮を頂ければ幸いです。レフェリーの任務は論文をリファインすることであって、基本的な誤りを指摘したり、論旨の明確さを要求するのは当然ですが、それ以上に、内容に立ち入って意見の違いを批判するのはレフェリーの仕事ではなく、読者の仕事だと考えます。よろしく御協力をお願い申し上げます。

8. 平成2年度決算・平成3年度予算書

平成2年度決算書

平成2年4月1日～平成3年3月31日

収入の部				
科目	2年予算額	決算額	差異	備考
会費	6,235,000	6,428,361	-193,361	
正会員	3,944,000	4,240,000	-296,000	
学生会員	351,000	455,000	-104,000	
海外会費員	240,800	183,361	57,439	
出版助成金	1,700,000	1,550,000	150,000	
予稿集売上金	13,488,000	6,420,000	7,068,000	
大利子収入	1,400,000	1,381,300	18,700	
雑収入	650,000	632,500	17,500	
	200,000	339,726	-139,726	
	20,000	52,368	-32,368	
小計	21,993,000	15,254,255	6,738,745	
前期繰越金	1,650,004	1,650,004		
合計	23,643,004	16,904,259		
支出の部				
科目	2年予算額	決算額	差異	備考
管理費	2,980,000	2,922,268	57,732	
業務委託費	2,200,000	2,283,466	-83,466	
通信費	300,000	497,982	-197,982	
印刷費	300,000	103,500	196,500	
旅費	50,000	0	50,000	
雑費	100,000	21,760	78,240	
事業費	30,000	15,560	14,440	
会誌分担金	18,208,000	10,757,812	7,450,188	
会報分担金	14,238,000	7,161,600	7,076,400	
大会開催費	700,000	700,918	-918	
予稿集印刷代	170,000	169,950	50	
その他	200,000	174,430	25,570	
広報活動費	950,000	1,056,261	-106,261	
名簿作成費	1,000,000	798,243	201,757	
基金繰入金	50,000	0	50,000	
国際会議分担金	850,000	696,410	153,590	
予備費	700,000	550,000	150,000	
	100,000	0	100,000	
小計	22,988,000	15,230,080	7,757,920	
次期繰越金	655,004	1,674,179		
合計	23,643,004	16,904,259		

8. 平成2年度決算・平成3年度予算書(続き)

平成3年度予算書

平成3年4月1日～平成4年3月31日

収入の部				
科目	3年予算額	2年予算額	2年決算額	備考
会費	6,468,980	6,235,000	6,428,361	
正学生会員費	4,104,000	3,944,000	4,240,000	540 × 8,000 × .95
学生会員費	446,500	351,000	455,000	94 × 5,000 × .95
海外学生会員費	168,480	240,800	183,361	54 × \$ 40 × .60
費助成金	1,750,000	1,700,000	1,550,000	35 × 50,000
出版助成金	14,405,000	13,488,000	6,420,000	
予稿集売上金	1,400,000	1,400,000	1,381,300	
大会参加費	350,000	650,000	632,500	
利子収入	400,000	200,000	339,726	
雑収入	30,000	20,000	52,368	
小計	22,944,700	21,993,000	15,254,255	
前期繰越金	1,674,179	1,650,004	1,650,004	
合計	24,618,879	23,643,004	16,904,259	
支出の部				
科目	3年予算額	2年予算額	2年決算額	備考
管理費	3,130,000	2,980,000	2,922,268	
業務委託費	2,400,000	2,200,000	2,283,466	委託費値上げ
通信費	400,000	300,000	497,982	
印刷費	100,000	300,000	103,500	
会合費	50,000	50,000	0	
旅費	150,000	100,000	21,760	
雑費	30,000	30,000	15,560	
事業費	18,415,000	18,208,000	10,757,812	
会誌分担金	15,245,000	14,238,000	7,161,600	
会報分送費	700,000	700,000	700,918	
会報印刷費	170,000	170,000	169,950	
会報分送費	200,000	200,000	174,430	
大会開催費	900,000	950,000	1,056,261	
予稿集印刷代	900,000	1,000,000	798,243	
その他	50,000	50,000	0	
広報活動費	50,000	50,000	0	
名簿作成費	0	850,000	696,410	
基金繰入金	1,750,000	700,000	550,000	
国際会議分担金	0	1,000,000	1,000,000	
予備費	100,000	100,000	0	
小計	23,195,000	22,988,000	15,230,080	
次期繰越金	1,423,879	655,004	1,674,179	
合計	24,618,879	23,643,004	16,904,259	

8. 平成2年度決算・平成3年度予算書(続き)

学会基金

科 目	決 算 額
当期繰入金 前期繰越金	550,000 9,300,000
合 計	9,850,000

(注) 利子は一般会計へ繰入

<特別会計>

田中館賞 (平成2年度)

収入の部			支出の部		
科 目	決 算 額	備 考	科 目	決 算 額	備 考
利子収入 その他 前期繰越金	19,146 0 901,800		賞 牌 代 次期繰越金	123,446 797,500	
合 計	920,946		合 計	920,946	

長谷川基金 (平成2年度)

収入の部		支出の部	
科 目	決 算 額	科 目	決 算 額
利 子 収 入 前 期 繰 越 金	26,485 367,250	賞 杯 代 次 期 繰 越 金	0 393,735
合 計	393,735	合 計	393,735

9. 国際交流事業について

先日の第89回地球電磁気・地球惑星圏学会総会において学会基金による国際学術交流事業が発足することになりました。学会基金の毎年増加する額(今年は175万円)の半分超(約100万円)を活用し、当学会の一層の発展を目指そうというものです。当事業では、特に一般に補助が得にくいアジアの研究者との交流、若手研究者の国際的な研究集会への参加等を支援することに重点をおいています。以下に当事業の「運用規定」を示します。当事業への会員諸兄の絶大なる御支援を御願ひするものです。なお、本年度から(2)の若手派遣事業を、また来年度から(1)の外国人招聘事業をスタートさせますから奮って御応募下さい(おしらせ参照)。太陽地球系科学を対象とする当学会は、国際交流を通じた研究推進が本質的に重要です。財源に制限があり、決して内容的に充実しているとは言えませんが、まず“小さな一歩”を踏み出したいと思ひます。この事業を呼び水に他の経費等と組み合わせせて効果的な国際交流が推進されることを、運営委員会は願っています。

学会基金による国際学術交流事業運用規定

(第89回地球電磁気・地球惑星圏学会総会申し合わせ事項、平成3年4月3日)

目的：本学会会員と世界の地球電磁気・地球惑星圏科学関係の研究者との学術交流を図る。

事業内容：

- (1)本学会春季並びに秋季講演会に参加する主としてアジア諸国の研究者の来日旅費及び滞在費（全額または一部）を補助する（略称：外国人招聘事業）。
- (2)外国で開かれる国際的な研究集会へ主として若手の会員が参加するための経費（渡航旅費及び滞在費）の一部を補助する（略称：若手派遣事業）。
- (3)国際学術研究集会等、広く国際学術交流の促進に役立つ事業への補助を行う。

資金及び運用計画：学会基金を当てる。原則として年間(1)と(2)については併せて若干名、(3)については、本学会が主催または共催するもので本学会会員の多数の参加が見込まれるものに限り、年間1件以内とする。

補助金の応募：(1)については世話に当たる会員が、(2)については当該集会等へ出席する会員が、また(3)についてはその事業責任者である会員が運営委員会に申請、または、推薦する。なお、応募書類は(1)と(2)については別に定めるが、(3)については特に定めない。

補助金受領者の選考：(1)については、年1回会報で公告（別紙1）し、運営委員会で決定/通知、補助金は講演会会場で附与する。また(2)については、年2回会報で公告（別紙2）し、運営委員会で決定/通知、学会事務センターより送金する。また(3)の選考にあたっては学識経験者よりなる選考委員会を設けることがある。

補助金受領者の義務：補助金受領者は、当該活動の終了後30日以内に本人、世話会員または事業責任者である会員によって運営委員会に報告書を提出しなければならない。なお、この報告書は学会会報に掲載される。

事業報告：会長は事業内容を年度毎にとりまとめ全賛助会員に報告する。

事業内容の変更：本事業の内容に変更がある場合は、学会規約第18条により総会で承認を受ける。

10. 研究助成金案内

東レ科学振興会 〆切1991年10月11日

山田科学振興財団 〆切1992年3月31日

この助成金は自然科学の基礎的研究を対象としており、各学会宛に2件以内の推薦依頼が来ています。援助の総件数は10件、総額は6,000万円、1件あたりの援助額は300～700万円とのことです。選考の結果は1992年7月迄に通知されます。

日産科学振興財団 〆切はこれから決定となるが、昨年と同様、8月末日となる予定。

詳しくは総務までお問い合わせ下さい。

11. おしらせ

- (1) **Rock Magnetism and Paleogeophysics** vol. 17 (1990)が刊行されました。ご希望の方は小額切手で760円(500+〒200円)を添えて下記までお申し込みください。

〒606-01京都市左京区北白川追分町 京都大学理学部地質鉱物学教室 鳥居雅之

- (2) 今年度の第22回岩石磁気・古地磁気研究会は、8月1日～3日、福井大学のお世話で開催される予定です。なお、会場・テーマなどの詳しいことは、福井大学の中島正志会員より5月中に関係の方々に連絡されます。

(3) 地球電磁気・地球惑星圏学会講演会への海外参加候補者募集

国際学術交流事業の一環として、主としてアジア諸国の関連分野研究者が本学会春季並びに秋季講演会に参加するための来日旅費及び滞在費の補助を下記により行ないますので、推薦希望者は期日までに応募願います。

1. 対象の集会：平成4年地球電磁気・地球惑星圏学会春季並びに秋季講演会

2. 応募資格：主としてアジア諸国の関連分野の研究者で1.の講演会で論文の発表もしくは議事の進行に携わる予定のもの、当該研究者の推薦は本学会正会員が行う。

- 3.募集人員：若干名
- 4.補助金額：年総額 40万円程度
- 5.応募手続き：所定の申請書類（学会事務センター備付）を平成3年9月2日（月）までに本学会運営委員会に提出する。なお、この期日は平成3年度秋季講演会開催日の1ヶ月前に設定されている。
- 6.補助金受領者の選考・義務：学会基金による国際学術交流事業運用規定に基づいて行なう。

(4) 国際学術研究集会への出席補助金受領候補者の募集

国際学術交流事業の一環として、外国で開催される国際的な学術研究集会（米国地球物理学連合春季秋季大会等も含む）へ参加するための経費（渡航旅費及び滞在費）の一部補助を下記により行ないますので、希望者は期日までに応募願います。

- 1.対象の集会： A:平成3年10月1日～平成4年3月31日、およびB:平成4年4月1日～9月30日の期間に外国で開催される国際的な学術研究集会
- 2.応募資格：35才以下（応募期日時）の地球電磁気・地球惑星圏学会正会員で国際的な学術研究集会に出席し論文の発表もしくは議事の進行に携わる予定のもの。
- 3.募集人員： 若干名
- 4.補助金額： 年総額 60万円以内
- 5.応募手続き： 所定の申請書類（学会事務センター備付）を、Aは平成3年6月30日、Bは平成3年12月31日までに本学会運営委員会に提出する。
- 6.補助金受領者の選考・義務：学会基金による国際学術交流事業運用規定に基づいて行なう。

<<会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿、お待ちしております。>>

地球電磁気・地球惑星圏学会	
会長	西田篤弘
総務	町田忍
〒229 神奈川県相模原市由野台3-1-1 宇宙科学研究所	
電話	0427-51-3911 FAX 0427-59-4236
庶務	寺沢敏夫
〒601 京都市左京区北白川追分町 京都大学理学部地球物理学教室	
電話	075-753-3952 (直) FAX 075-722-7884
庶務	林幹治
〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学部地球物理学教室	
電話	03-3815-8020 (直) FAX 03-3818-0745
運営委員会	
〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル (財) 日本学会事務センター気付	
電話	03-3817-5801 FAX 03-3817-5800

入会申し込み、国際学術交流事業への応募は運営委員会宛、田中館賞推薦は会長宛、研究助成金案内は総務までご連絡ください。